

「訪れ」

吉城組 西念寺前住職 三島 清圓

時代は昭和の事ですが、私の生まれたお寺には沢山の叔父や叔母が居られました。皆、他県に所帯をもっておられたのですが、お盆になると皆、お寺に帰省してくるのです。

ホテルなどない時代ですから、皆、お寺に泊まりました。母は大変だったろうと思いますが、それは賑やかなことでした。

一年ぶりの会話に花が咲きます。その会話の中に亡くなった方がよく登場しました。しかも、今も生きておられるように登場するのです。例えば、「そんな事いうと兄さんに叱られますよ」

とか

「今頃、腹を抱えて笑っておられるわい」

とか。このお兄様と言うのが、すでに亡くなった私の父でした。子供ごころにも不思議な会話でしたが、いま思うと昭和の中頃までは、亡き人と世界を共有できた豊かな文化が飛騨にはあったのだなあと、つくづく思います。

しかし、この頃は誰も亡くなった人の事を口にしませんね。死んだら終わりという事なのでしょう。去る者は日々に疎しと言われています。亡くなった方も、月日が経ってみると次第に忘れてしまうという事です。

人は二度死ぬという言葉があります。二度とは、その方が死んだ時と、忘れた時の二度だという意味だそうです。こういう言葉にふれますと「ああ、これからはもっと思い出してやらなければ」と思うのですが、そうはうまくいきません。思い出せないものを思い出そうとすることには、無理があるからです。

しかし、無理に思い出そうとしなくとも、思い出すときはフッと思い出します。何かの拍子に、懐かしい顔や、その人の仕草が、声が、フッと浮かんできます。それは、自分が思い出すのではなく、向こうから訪ねて来られるからでないでしょうか。

相手は何も語りません。そこには沈黙があるばかりです。しかし、信仰心のある方は、その沈黙と無言の会話を交わします。沈黙だと感じるのは、相手の語りかける言葉が多すぎて、かえって沈黙のように感じるだけではないでしょうか。

沈黙に耳を澄ます。すると、沈黙は南無阿弥陀仏と語っているように、私は聞こえます。

もうすぐお盆がやってきますが、お内仏の前に座って耳を澄ませてみましょう。亡き人の願いが、「念佛申せ」

という声になって、ちゃんと聞こえます。それが本当の供養なのです。